

海外遠征報告

1. オーストラリア
2. アラスカ
3. カリマンタン
4. 韓国

西オーストラリア砂漠 踏破計画

1. はじめに
2. 偵察を願みて
3. 砂漠とは？

1. はじめに

昭和44年10月8日、山本三郎、松本繁文によりサハラ砂漠縦断計画が決定されて以来、資料集めに当り、幾多の知名人を訪問して来た。その結果得られたものは、私達の実力不足以外の何者でもなかった。そこで、私達はサハラ砂漠の過酷な気象条件より一段階下にあると思われる西オーストラリア砂漠に目をつけた。

昭和46年1月、オーストラリア計画を開始し、その年の7月から8月に福山修、山本三郎の偵察隊を送り、昭和47年7月から9月に本隊を送るに致った。

2. 偵察を願みて

今回の偵察を終了して、私が最も感じた事は、今までの我々の砂漠に関する知識が、いかに不十分であったか、という事であった。その意味においては、今回、急遽サンデー砂漠踏破計画を白紙にもどし、ギブリン砂漠偵察に踏み切った事は、大変意義があったと思うのである。

それは、オーストラリア砂漠に関する資料の日本での収集が不十分であった事が挙げられるが、「砂漠の地質、風土、気候等のきびしさは現地へ行ってみなければわからない。」という事も確かである。しかしこの事に関しては今回の偵察で我々がもち帰った資料でおおよその所はまかなう事ができるのではないと思われる。が、この砂漠自体の知識とは別に、今回我々が苦労したところの砂漠における車、写真の技術に関する問題がある。車は本隊が荷置きを行う際に必ず必要な交通運搬の手段であり、写真は本隊の行動を記録に残す最大の手段である。

まず車に関して述べれば、今回偵察では、トヨタランドクルザーを使用した。これは砂漠を走る際には四輪駆動の車が必要であり、オーストラリアではこの車かランドローバーが常用されているからである。これらの車は日本の乗用車等とはだいぶ異り、高度なメカニクスの知識が必要とされるので、我々もかなり苦労した次第である。砂漠内での車のトラブルは直接我々の生命にかかわるものであるから、隊員全員が来年の本隊出発まで、

懸命に勉強し、マスターせねばならない。

又、写真に関しては、私自身、日本でもかなり勉強し、機械も日本でも最高といわれるニコンF、及びニコマートを使用したのであるが、まだもう一步の感もあった。本隊ではこの偵察よりももっともっとすばらしい写真を期待したいので、隊員の一人ないし二人が写真だけに専念し、出発までに技術を徹底的にマスターすることが必要である。特に広角撮影を中心に練習しなければならないという事をつけ加えておく。この二つの他にさらに、英語の勉強、砂漠の居留地におしこまれている現住民に関する研究、及び最も肝心な砂漠自体の研究等、我が隊が来年度の本隊出発までになさねばならない事は山積みされているのである。

以上、問題点を並べたが、最後に今回の偵察を顧みて、我々が日本人として初めてオーストラリア砂漠に足跡を残し、おおよそ予定通りに計画を運び、いちおうの成果を修めてきた事に対し、私個人としては、今偵察はいちおう成功という名で呼べるものと確信する次第である。

(ふくやまおさむ)

3. 砂漠とは

南半球の太平洋の真中に静かに位置するオーストラリアは日本の21倍の面積を持ち、その豊富な地下資源によって今や羊毛の国から未来の大国に移り変わろうとしている。そんな国にある西オーストラリア砂漠へ私達は出かけて行った。

砂漠とはいったいどんなところだろうか？ 地平線まで続く広大な大地とは？ 大地を焦がす砂漠の太陽とは？ 乾燥とは？ そして大自然に対する一個の人間の力の限界とは？ 数々の疑問をいだいて私達はオーストラリアへ旅立った。

私達のオーストラリアでの活動は二つあった。一つは四輪駆動のランドローバーでギブソン砂漠

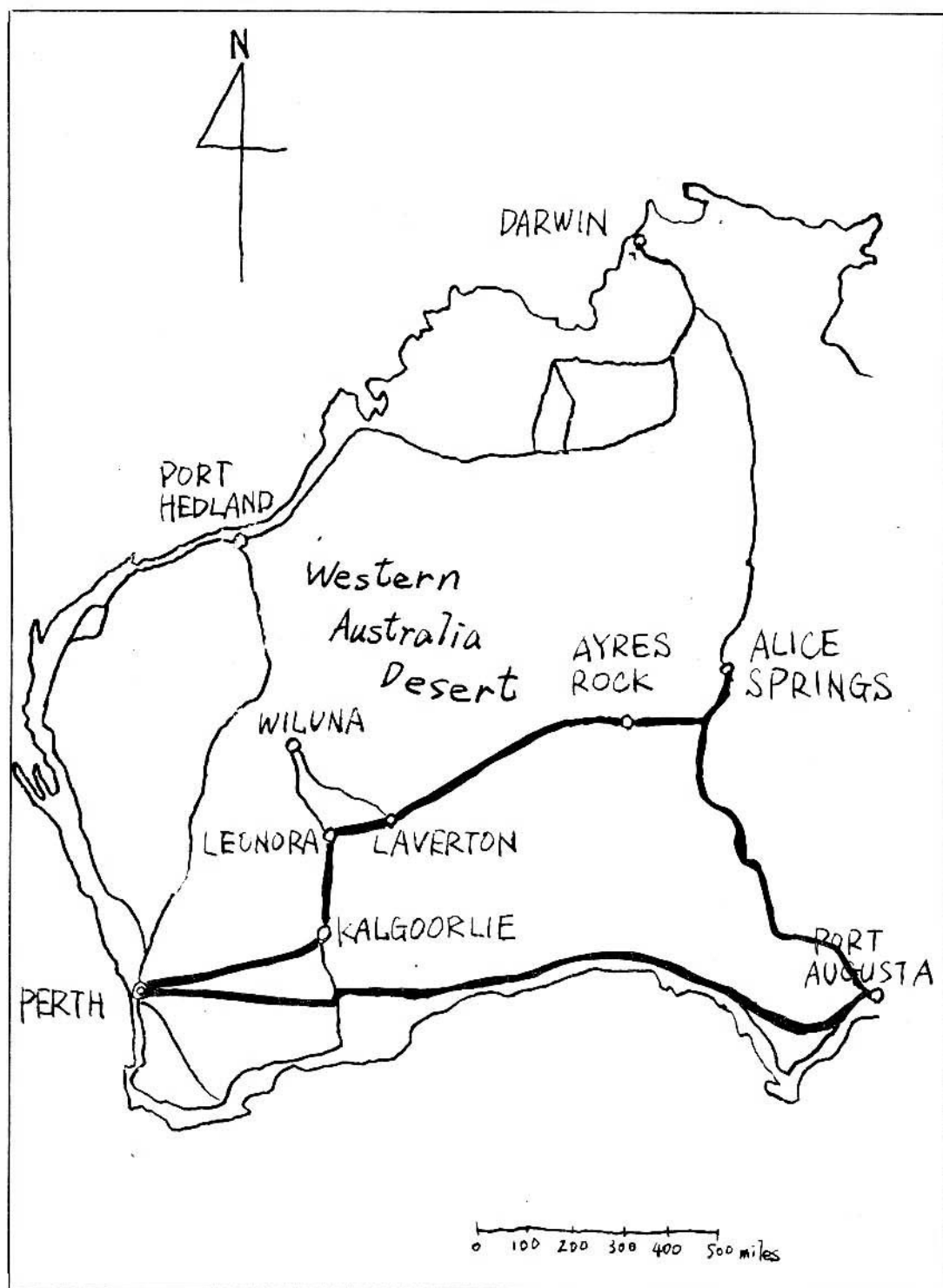
を横断し、縦走行距離6700 Kmを走破するもの。もう一つは砂漠の真中へ入り、約170 Kmの徒歩縦断をすることとであった。(第二計画は予定では馬と馬車による縦断であったが、渉外の都合により、上記の計画に変更された。)

7月5日、伊丹空航を出発、その日のうちにパースに到着した。すぐ渉外活動に入り、準備を備え19日、ギブソン砂漠横断に出発し、8月1日無事パースに帰還、再び第二計画の準備にとりかかり、8月13日砂漠へ再びアタックし、9月7日、再び無事パースに帰還した。

予定していた馬と馬車による縦断は都合により出来なく、非常に残念であったが、活動では所期の目的を達し、より深く砂漠を知ることが出来た。すべての現地での活動において、現地の人々の深い理解を得ることが出来た。この計画を無事終了させることが出来たのは、現地の人々の深い理解と協力があったためであった。まずは、迷惑をかけた人々に多大の感謝の念を捧げる次第であります。

四輪駆動のランドローバーで、パースの街を飛び出し、まず最初に目に入ったのは緑の森林地帯であった。パース近郊はオーストラリアでも一番気候のよい地域に当り、私達が訪れた冬期であっても朝晩を除けばそんなに寒さは感じない。ケップンの気候区分に依れば、地中海性気候に当る地域である。その地域は低い丘が連なり、森林地帯、放牧地帯、そして果樹園地帯と、まことにのどかな景観を呈している。

しかし、パースから1日も車で走り続けると、そこはもう地平線で囲まれた、雄大な地形へと変わって行く。カルグーリ、レオノラ、レーバトンと進んで行くと、枯木のブッシュでおおわれた完全な砂漠地帯へ入る。



砂漠、人は一面砂でおおわれた砂丘とヤシの木が繁るオアシスを想像するであろう。しかし、地球上の砂漠と言われる地域のほんの一部分がその地域に当るにすぎないのである。このオーストラリアの内陸砂漠はブッシュと呼ばれ、一面が枯木やトゲのある草でおおわれ、砂丘とオアシスの砂漠の概念を持つ人には、とても砂漠とは呼べないようなところである。

同様に私達も落胆した。砂漠の真中へ入って来ているはずなのに、どこまで行っても砂漠は現われて来ない。目に入るのは、枯木のブッシュと、その中を飛び回る鳥やカンガルーだけ。又、その時期が冬期であったため、車の中では昼間でもまったく暑さは感じない。むしろ、車の中に入り込む風が快いぐらいであった。それでも、車のうしろにもくもくと登って行く砂ぼこりと、地平線まで続く赤茶色の世界とに満足し、時々、地平線の彼方からニョッキリと顔を出す岩山と、完全に干上がったクリークを見ながら“これが砂漠なんだなあ”と自分を納得させていた。

砂漠の中は、枯木とトゲのある草におおわれているが、人を寄せつけない暗黒の地とは全く感じられなかった。クリークの中には、真白な幹を持つクリバーの木が、黄緑の明るい葉を繁らせ、その下に広がっている赤、黄、白の三色でおおわれたお花畑には、きれいな小鳥が、美しい声で鳴き野鳥の楽園を感じさせてくれる。それに、常に雲一つ持っていない広い空は、輝くばかりの青さで、砂漠の世界を生き返らせている。

それにも増して、砂漠が死の世界であるという意識を一蹴してくれるものに、夕焼けと、朝焼け、そして地平線から出る月の出とがある。早朝、日の出前にテントから飛び出すと、東の空が真赤に変色している。赤はしだいに薄く広がって行き、その真中から、地上を一瞬のうちに明るく照らす

太陽が顔を出す。この太陽は、めぐみの太陽以外の何ものでもなかった。朝方の冷え込みは聞きしにまさるもので、シュラフの中で寒さに気がつく、もうじっとしてられない。すぐテントの外に飛び出し、そこらの枯木を集め火をつけるのである。このたき火は全く快い。マッチ1本で、枯木はあっという間に燃え上り、すぐ体を暖めてくれる。シュラフの中で寒さに耐えるより、この方が全く快適なのである。そして、車の蔭が長く延びる頃、西の空がまずピンク色にそまり、やがて東の空も一面ピンク色にそまる。そこは、ピンク色のペールで包まれた、メルヘンの世界である。ピンクのペールで包まれた大平原の真中を、オモチャのような車は、ゆっくり進んで行くのである。ピンク色の世界を通り過ぎた車は、もう一つのメルヘンの世界へ入り込んで行く。暗やみの中へ入って行った車は、やがて、東の空が再び紅くそまるのを見た。紅色が一点からだんだんと、東の空全体をそめてゆくと、地平線の彼方から、真赤々、これ以外に“赤”という字を使うことは出来ないと思わせるような、赤い月がはずかしそうに顔を出した。

死の世界の中のメルヘン、砂漠のどこに死の世界が存在するのだろうか。砂漠とは全くもって死の世界などではない。そこは誰にも知られないメルヘンの世界なのだ。

私達は計画通りに砂漠横断、縦走行距離6700 Kmの走破に成功した。総日数2週間、1日の走行距離平均300 Km。1回のパンクと、1回のエンジントラブル以外はさしたるアクシデントもなく、無事に第一プランを終えたのであった。そこで得たものは、メルヘンの世界、砂漠、美しい穏やかな砂漠の姿であった。

一方、私達は常に“違う、違う”と思い続けて

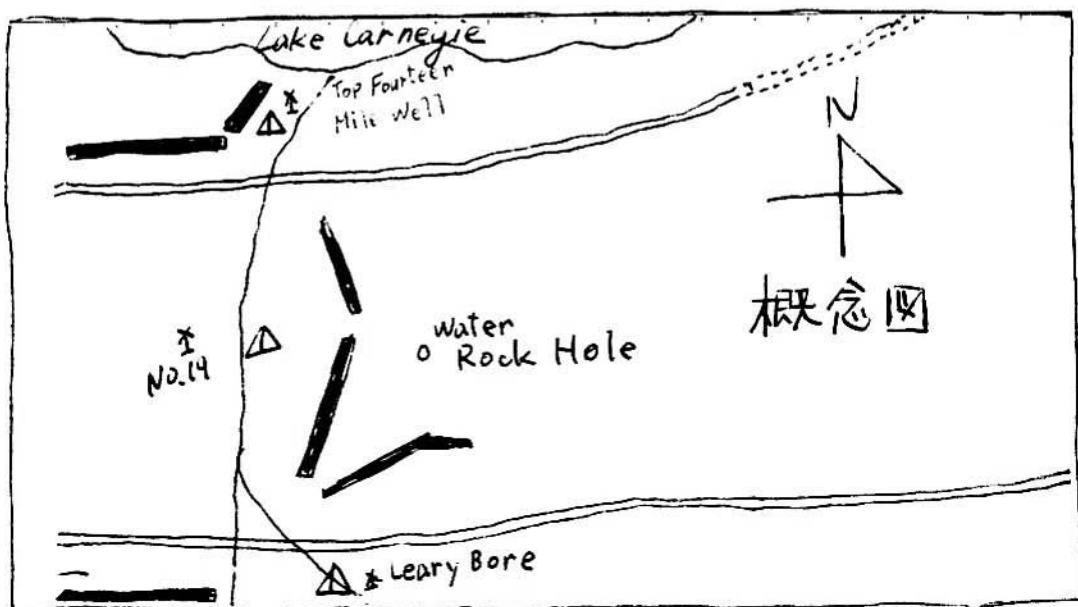
いたのである。“これは砂漠ではない” “もっと偉大な、雄大な、私達を寄せつけない砂漠があるはずだ” その思いをいだいて、再び、私達は砂漠へと歩を向けて行った。

ベースからカルグーリまで電車で、レオノラ、ウィルナへはヒッチハイクで順調に到着し、トラックで砂漠の真中のウインドミルの井戸へ連れて行ってもらった。

リリー、ボアというこの井戸はフォーティーンマイルクリークの近くにあり、この枯川に沿って7～8マイル行くとNo, 19 Well があり、さらに、10マイル程行くとトップフォーティーンマイルウェルがある。その北にはオーストラリアの三大湖に入るレイクカーネギーという塩湖が広がっている。私達が目的としたのはこの乾湖へ到達することと、No, 19 Well の東約7～8マイルの地点にあるWater Rock Hole へ行き、きれいな水を飲むことであった。

ベースキャンプを張ったリリー、ボアからレイクカーネギーまでは約20マイルであるが、その

間に全く水がなく、まず水の確保から始めなければならなかった。ベースへ着いた次の日、地図と磁石をたよりに偵察も兼ねて、No, 19 Well を探しに行った。昼飯とポリタン1本とナタを持って、日の出と共に出発していった。早朝は太陽の光が快く、軽快に大地を踏みしめて歩いて行った。ブッシュの砂漠へ一歩足を入れるともう自分の位置が全くわからなくなる。だから私達は常にクリークから離れることは出来ない。ちょうど昼頃目的とする地点へ到着したが、Well らしきものは見当らない。一時間程探し回ったが、ついにWell は見つからなかった。時間がなくなったため、見つけないままで帰って来た。Well が見つかったら水の確保が出来たので非常に動きやすかったが、見つけることが出来なかったため、水の心配からしなければならなくなった。そこでレイクカーネギーへ行くまでの予定表を作ってみた。まず第一日目偵察に行った地点まで水を運び、テントを移し、そこを第二ベースとする。二日目に第一ベース地点まで帰り、三日目に再び同じコースで食糧をデポする。四日目にトップフォーティーンマイル



ルウェル地点まで再びベースを移し、そこからレイクカーネギーへアタックするものであった。トップフォーティーンマイルウェルも場所は定かではなく、全日程の水を計算して、デポしなければならなかった。

水の量は、それまでの経験から1日1人2ℓとした。食糧も、最小限軽いものを用意した。水はWellの使用したが、ポウフラが浮いているような水で、1回沸騰しなければならなかった。そうしてすべての準備を備え、ジーパンにスポーツシャツでズックをはき、キスリングをかついでアタックが開始された。

砂漠の歩行、それもボッカ、これ以上砂漠と深く接する方法はないと思われる極限のスタイルで早朝の第1ベースを出発して行った。約25kgの荷物のためか、別に重さは感じない。ただ、荷物が水であるため、かつぎにくいことは確かである。クリークに沿って、1ピッチ1時間で歩いて行った。朝方9:00頃までは太陽の直射日光もそんなに感じないが10時を過ぎるとそこはもう地獄としか言いようがなかった。太陽の光は容赦なく、所々で起っている風も、熱風に変わって来た。ノドの乾きと共に、荷物が肩にくい込みはじめ、バスケットシューズの底から、河原の石が足をいためつける。大自然の過酷なしうちを受けながらも予定は少しずつ進んで行った。第3ベースへ到着したのは第4日目だった。そして、そこでは、好運にもWellを見つけることが出来た。今まで水を節約していたが、ここでは、消毒することもしに浴びる程水を飲んだ。

サハラ砂漠の所々にオアシスがあるように、オーストラリアの砂漠には、ウィンドミルの井戸がある。この井戸がカンガルーや野生の鳥たちの命の源なのである。

次の日、大望のレイクカーネギーにアタックし

た。ジャリ石の低い丘を幾つも越えて行くと彼方に砂丘らしきものが見えて来た。砂丘目ざして歩いて行くと、塩湖の小さいのが現われた。

塩湖の真中を横断して行くと、太陽に暖められた大地の暑さを直接肌に感じ、風がないと、ムシ風呂に入っているようなムーとした暑さがおそって来る。やがて、直径数kmあると思われる表面が塩で白くなった湖の向うに最後の砂丘が現われて来た。最後の塩湖の横断が始まった。塩湖は干上ってまだ間がないらしく、土は湿り気を持っている。それでも真中の辺へ行くと、乾燥して空気を含んだ土は、足を5cm程うずめ、ちょうど雪の上を歩くようにザクザクと音がする。それと共に肩にくい込む荷物は、私達を苦しめ続けた。

塩湖を30分で横断し、最後の砂丘へかけ登るとその向うに雄大な塩湖、レイクカーネギーが横たわっていた。やがて、夕日が沈み、2人の影は塩湖に長く伸びていた。

砂漠を、より過酷な大自然を求めてはるばる訪れたオーストラリア、やはり、そこには予想以上の大自然が待っていた。真昼には、私達に寝ることだけしかさせなかった大自然、その前に立って、今私は、新たに恐怖さえ感じている。事実、私は砂漠を知って、知れば知る程恐ろしくなった。だが、この恐怖や苦痛こそ、私が求めていたものではなかったのだろうか。…………

砂漠から離れるトラックの中で“終った”という安堵感と共に、寂しさにも似た郷愁を感じていた。そして、いつの日か再びあの地平線まで続く大地と会えることを祈って、砂漠に別れを告げた。

(つきたにかつひこ)

工学部三回生

* * * * *